

# からこかぎ

第20号 平成29年11月11日(土)発行

唐古・鍵遺跡の保存と活用を支援する会

〒636-0247 奈良県磯城郡田原本町阪手 233-1 青垣生涯学習センター唐古・鍵考古学ミュージアム内

TEL 090-9257-3688

Email: karakokagi-sien.jimdo.com

## 遺物紹介 石包丁

### 会報編集グループ

#### 1 用途

今回ご紹介します「石包丁」は、稲作の伝来とともに日本に伝わってきたと考えられています。国内最古の稲作遺跡唐津市菜畑遺跡からも、外湾刃半月型の磨製石包丁（下写真 12.4cm）が出土しています。同様の型式の出土例は、朝鮮半島南部や北部九州にみられます。

その用途ですが、森本六爾氏の「日本農耕文化の起源」（昭和16年発行）では、穂を摘む道具として使用されていたと、いち早く指摘していました。高倍率の顕微鏡の使用痕分析によると、イネとの接触部に明るく滑らかな穀物の光沢が認められ、穂摘みの使用を裏付けています。その使用法ですが、孔を通したひもに指を入れ、穂先を石包丁と親指の間に挟み、摘み取ります。



#### 2 製作工程

その工程ですが、①石材獲得 ②粗加工（打撃で扁平な素材剥片→打撃で外形を作る）③器形調整（外周・縁辺を細かく剥離調整）④穿孔 ⑤研磨（粗い砥石、細かい砥石で研磨）⑥付刃（研磨で刃付け）と復元されています。右上の写真（田原本町教育委員会図録より）は、改装前の唐古・鍵考古学ミュージアム第2室に、緑

泥片岩製石庖丁の製作工程が展示されていたものです。出土場所や製作時期が異なり、比較が難しいのですが、1～4は粗加工の段階、5は穿孔から研磨の段階と思われます。



#### 3 石材の入手

唐古・鍵遺跡の石包丁は、第一次調査（大和唐古彌生式遺跡の研究）では、総数110個を超える石包丁が発見され、これまで、遺跡中央区を中心に各地区の発掘調査でも数多く出土しています。遺跡では水田遺構が未発見のこともあり、稲作を裏付ける資料とされています。また、第一次調査報告では、当初は耳成山の流紋岩を使用し、弥生中期になると加工が容易な紀ノ川流域の結晶片岩に変わったと指摘しています。

石材の獲得方法について、①直接入手（現地生産・半製品化）②間接入手（拠点集落を介し入手）③再配分（首長を介し入手）④交易（市場や仲介業者を通じ入手）のパターンが想定されます。

石包丁に関する研究は、その機能（用途）、型式分類、分布および製作方法等多様な論議がな

されてきましたが、「石材の獲得と生産そして消費」に関連付けて弥生社会を解明する検討が注目されます。

#### 4 石材の分布

酒井龍一奈良大学名誉教授は、畿内の中期の弥生遺跡から出土した石包丁の石材を詳細に分析し、その分布を①サヌカイト（播磨以西の瀬戸内沿岸）②粘板岩（畿内北部と北辺）③結晶片岩（畿内南部と南辺）④粘板岩と結晶片岩（摂津東部）とに分類しています。それらの地域からは打製石器用サヌカイトがくまなく使用出土していることを根拠に、異なった分布圏相互間是对立関係ではなかったと評価しています。

さらに、同教授は、石材を産出しない低地部の遺跡からも石包丁をはじめ石器が満遍なく出土することから、産出地の石材を共同使用し、各集団（加工技術と道具を保有するにとどまる）は、石材や半製品を確実に供給されていたとし

ています。石材などは、交通の結節点に所在する 5km 間隔の拠点集落に集約・流通され、それに適応した周辺集落の配置がなされ受給されていたとしています。

そして注目したいのは、この物流関係を維持・持続するために、畿内の弥生社会は、格差が生じにくい等質的な社会構造であったと結論づけ、それが突出した首長層の形成が他地域と比べ遅れた理由としています。

最近では、このように一般的な互酬関係から遠隔地交易にいたる石材や金属器などの物流のシステムの変遷に着目し弥生社会の変化を論ずる意見が多くみられます。その視点で、石包丁をはじめとする石材の流通をみると、先述した酒井名誉教授が指摘する通り、弥生中期の奈良盆地や河内平野では北部九州や丹後地方と異なり一般的な互酬関係が持続していたといえます。

## 森本六爾（1）

### 『原始的繪畫を有する彌生式土器について』

#### 井上 知章

「考古学の殉教者」と呼ばれる森本六爾先生は、唐古・鍵遺跡から程近い桜井市大泉の地で、明治 36 年に生をうけ昭和 11 年鎌倉市極楽寺で亡くなる 32 歳 10 ヶ月の短い生涯でしたが、その全てを考古学に捧げ、今日の日本考古学の礎を築きました。お弟子さんに、小林行雄、杉原莊介、藤森栄一先生などがいることで、その功績はわかります。

その業績は、甕棺の研究や青銅器研究や稲作研究など多分野にわたりますが、本号から随時、弥生研究に着目し、その著作を紹介します。

まずは弥生研究の処女作の標記論文から報告します。絵画土器は、磯城郡川東村唐古にすむ収集家が唐古遺跡（唐古・鍵遺跡）で見つけた鹿を描いた土器片 4 片です。（注 1・2）



（大泉の生家写真）

#### 1 はじめに

論文は、冒頭で絵画土器（注 3）に描かれている土器や絵画（鹿）の精緻な分析をしています。しかし、そのみならずそれらが表象する意味を解読し、弥生集団の文化を復元しています。この手法は、象徴表現や伝達方法を人間独自の文化的想像力として捉え、それを手がかりとして社会構造（文化）を解明するもので、1960 年以降盛んに論じられている「象徴人類学」に通じるものがあります。この手法は、最近の考

古学にも取り入れられ、絵画の背景にある觀念の解明を通じて社会の構造を分析する絵画土器研究にも生かされています。

大正13年「考古学雑誌」第14巻第4号巻末に掲載された論文(本会のホームページに転載)ですが、極めて先駆性の高い著作と思います。

## 2 土器の説明

土器片(壺の肩部)は、長さ9.9cm・幅は広い所で6.8cm、厚さ9.5mmで「甚だ緻密な、褐色の、面にやゝ滑澤ある一小片」と実測しています。湾曲面から推定し、上部の径が28.3cm・下部の径が43.9cmとなり、腹部の最大径が33.3cmの大型土器と復元しています。土器の特徴は、「緻密厚手」で精細な刷毛目を施され、「滑澤」で、大型壺に動物の絵が描かれていると報告されています。このことから、多くの弥生土器と異なり「用途が特殊的」と推測しています。(現在は、祭祀具とする意見が多数)



(シカが描かれた絵画土器片)

また、土器の分類も試み、①奢侈式(精品)と②農民式(粗品)といった濱田耕作先生の土器分類に加え、奢侈品の精品の範疇の1つに属するものとして、3種類の土器の併存を提案しています。

なお、当時は、絵画土器の出土例が少なく、最古の「自由繪畫」の1つとその価値を強調しています。

## (2) 絵画(鹿)

論文は、「生活の特徴が芸術(土器絵画)の特徴として現れる」として、そこから生業など生活環境を復元しています。当時は、奈良県二階堂村平等坊石器遺跡(平等坊岩室遺跡)から粃殻痕土器が出土し、朝鮮半島金海貝塚から炭化米が出土し、福岡県八女郡長峯村岩崎(岩崎遺跡)から焼米が出土していました。(注4)このことから、大和の新石器時代(弥生時代)は、「Savageの時代から Barbarismの域」に達し、一部は農耕の生活に入っていたとしています。しかし、当時の大和地方は、鹿が描かれた絵画土器から、旧来の狩猟生活が持続し農耕より狩猟が優先していた社会と評価しています。その根拠に、新澤村一(一町遺跡)と二階堂村岩室(平等坊岩室遺跡)やその他の弥生遺跡から多くの石鏃・石槍・石斧・その他利器や鹿・野猪などの獣骨が出土していることをあげています。そして、当時の人々は、絵画に美的感情を満足させるとともにある種の郷愁ともいふべき

「Fetishism的宗教的意義」を感じていたと結論付けています。

## (3) 精神生活の抽出

論文は、さらに論を進め、生活の特徴が「芸術」(土器絵画)の特徴と関連性が高いとして、「彌生式石器時代の民衆の精神的生活」(文化)を復元しています。

土器絵画に流れる作り手の作風を「情緒」と表現し、「生に対する真実性のような情緒を伴ったある種の優しさと愛らしさと柔らかさのみがある」と評しています。それは、彌生土器の表面の幾何学的文様や精巧な磨製石器が「直線によって示された単純かつ直味で、また、流れる水や柔らかな波に比すべき情緒」に共通するものとします。そして、その土器の基調が「心生活」を表しているとし、土器の小片に映った弥生時代の人々の精神生活の内容は、「率直で単純でそして平和であった」と結論づけています。そこには、絵画土器が興隆した弥生中期後半に

至っても稲作生活と採集生活が共存し、争いのない豊かな精神生活を維持していた奈良盆地の弥生集落像を復元しています。論文は、階層分化が進行し弥生時代を争いの時代と規定している北部九州や吉備地域など他地域の弥生時代像とは異なった集落像を導いています。

(注1) 大正9年に畝傍中学卒業後、代用教員をしながら奈良県内の古墳や遺跡を踏査していた。昭和2年に考古学研究会を設立し「考古学研究」を創刊するまでの期間を考古学研究の研鑽期とされている。大正13年3月の高田高等女学校の「上古遺物展覧会」の展示物の出品依頼のため、地元の採集家飯田松次郎氏に面談した際、鹿を描いた「彌生式土器の一片」に出会う。

## 「唐古・鍵遺跡」(座学)に参加して (第21回弥生ウォーク)

宮川 真由美

### 1 はじめに

8月26日(土)に開催された第21回の弥生ウォークは、例年のおお、田原本町生涯学習センター2階の研修室で開催され、25名を超える参加者がありました。今回は、日本の弥生文化研究の骨格をつくった「大和唐古彌生式遺跡の研究」(第1次調査報告書)を確認しました。当日配布された資料は、「からこかぎ」第19号に掲載された説明文と「弥生時代の考古学」8巻に掲載された故豆谷和之先生の「唐古・鍵遺跡」(以下、「豆谷論文」という)でした。最近の弥生研究の集大成された「弥生時代の考古学」(8号)に掲載された豆谷論文と弥生文化研究の原典といわれる「大和唐古彌生式遺跡の研究」(以下「研究書」という)を見比べることができました。

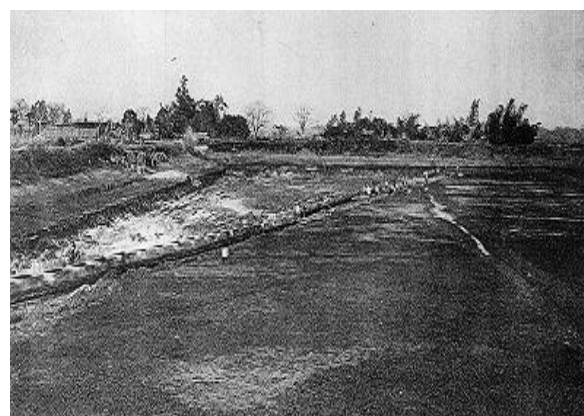
説明は、研究書の目次に沿ってスライドでおこなわれましたが、その前に森本六爾と唐古・鍵遺跡(以下、「遺跡」という)の関わりが説

(注2) 「」は、原典を引用した表現。

(注3) 絵画土器は、弥生前期末から中期初頭に北部九州を中心に甕棺に描かれている。しかし、分布の中心は、中期後半の畿内で、唐古・鍵遺跡は多く清水風遺跡を含めると国内の半数以上の絵画土器が出土したと報告されている。

(注4) 平等坊遺跡の粃殻痕土器は、拓本のみ現存。岩崎遺跡の炭化米は現在、東京大学理学部教室で保管され、C14測定の結果、短粒の小型米で弥生後期以前と判定されている。金海貝塚は、韓国慶尚南道金海邑の標高50mの台地上にあり、1907年より調査が開始され、1920年濱田耕作氏などの調査で、貨泉が出土し一緒に炭化米塊が出土した。

明されました。今後、会報で森本六爾の業績を掲載する予定ということでした。



(発掘前の唐古池)

### 2 地形・環境

研究書の記載順は、現在も各地の発掘報告書の範となり受け継がれているとのことで、80年間継続されていることに感動しました。研究書では、遺跡周囲の地勢は湖沼帯で、調査地は三角州の立地とのことでした。今日の自然堤防という見解と異なっていました。

遺跡の地形について、第3次調査などで確定されていた前期からの北・西・南の3微高地案に対し、豆谷論文では、低湿地とされていた中

中央区に前期以来の住居跡（98 次調査）を含め活動痕跡がある一方、南地区が前期の活動痕跡がないと指摘していることが説明されました。遺跡での生活を復元するうえで、地勢の把握は不可欠ですので改めて大事だと思いました。

また、研究書は、遺跡の環境報告が木器の樹種分析から導かれていました。その関連で、豆谷論文は環濠の役割およびその植生分析に注目し、遺跡の木材利用のため森林管理を想定しているとのことでした。最近、弥生期の集落の森林管理と利用に関する学説が目立つようになり、そのなかでは豆谷さんの論文が多く引用されていると報告がありました。

### 3 遺構

遺構は、中・南・北の砂層と 100 を超える堅穴とのことですが、やはり多数の堅穴の性格が気になりました。低湿地を根拠とした木器の貯蔵穴とする見方と異なり、研究書では、その地層に残された堅穴と住居関連遺物が多く出土していることを根拠に堅穴住居遺構としています。唐古池近くの第 98 次の堅穴住居址が同様の地層条件であるとの最近の発掘情報がその考えを裏付けていました。

一方、研究書は、堅穴を土器編年と関連付けて、遺跡の集落動向を解明していました。現在では、当然視されるのですが、80 年前に既に集落の変遷に関わる検討がなされていました。そこで、豆谷論文の説明があり、南地区の集落址（65 次調査）の詳細な分析から「小溝を共有する世帯共同体」といった集落像が復元され

ているとのことでした。最近、集落址を基に、人口を含めた集落の変遷を復元する研究が進んでいるとの説明があり、今後の遺跡の発掘成果が楽しみとなりました。

### 4 遺物

スライドを使用し、土器・石器・木製品・金属器などの説明がありました。やはり、中心は土器編年でした。研究書は、小林行雄先生の様式論をもとに唐古編年を提示し、その後の弥生時代の時間軸として採用されていました。現在、奈良県の弥生研究では、唐古（畿内）編年と大和編年の二つが使用されています。前者は、一括出土した土器群を I から V 様式に分類区分し編年を構成しています。一方、後者は土器自体の変化に着目してそれを型式として重視しているとのことでした。土器編年が地域社会の変化を画期として正確に反映されるのが望ましいと思います。最近 C14 と関連づけて時間軸を確定する作業が進んでいて、その成果が期待されるとのことでした。

### 5 最後に

研究書は、稲作と金属器と土器といった文化要素を新たに発見し、初めて弥生期の生活相を明らかにしています。極めて、学史的価値が高いものと思いました。しかし、最近、稲作や金属器について見直しが進んでいます。今回確認した前期を中心とした濃厚な遺構・遺物群は、その見直しの動きと異なったものでした。その乖離を解決できるのは、今後の遺跡の発掘とその検討作業と思いました。

## 遺跡紹介 橿原市瀬田遺跡

### —終末期の大型円形周溝墓—

#### 弥生ウォーク世話人グループ

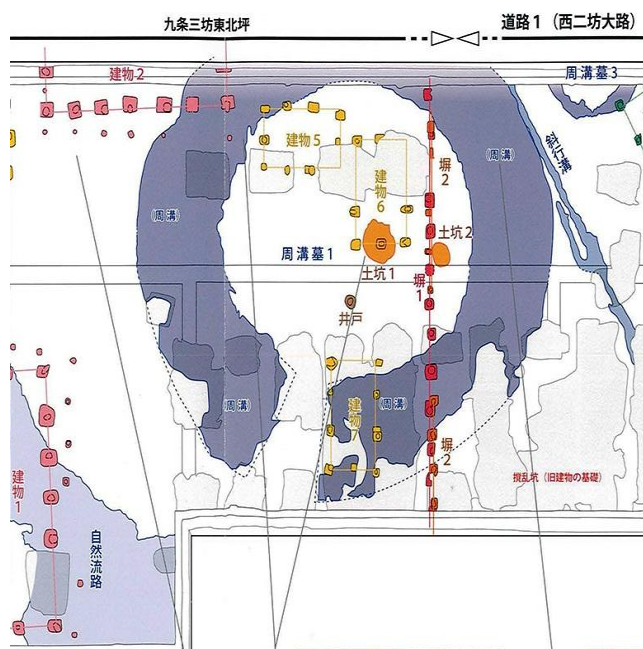
今回は、瀬田遺跡を報告いたします。奈良文化財研究所が、奈良職業能力開発促進センター本館の建て替えに伴う調査で、大型円形周溝

墓（SZ-4500）を検出した遺跡です。奈良県橿原市城殿町にあり、特別史跡の元薬師寺の 100m 南にあり、近くには飛鳥川をはさんで拠点集落の四分遺跡、北東 7km には箸中山古墳（箸墓古墳）があります。

#### 1 調査地

調査地は、藤原京右京九条二坊に相当し、縄文

～弥生時代の遺物包含層が広がる瀬田遺跡の一部にあっています。その層序は、現地表面から 90cm 下位に黄灰色シルト層（水流性細粒堆積物）があり、上面に藤原京期の遺構が、その直下に薄い粘土層（5cm）があり、縄文・弥生の土器片を含む遺物包含層となっています（その直下に 20cm の黒褐色粘土層の縄文期の遺物包含層）。検出された遺構は、弥生時代の周溝墓 3 基や斜行溝をはじめ藤原京期や平安時代道路側溝や建物などです。新聞報道などで注目されたのは、奈良盆地では珍しい撥形の陸橋が備わっていた円形周溝墓です。残りの 2 基は方形周溝墓で、方形と円形周溝墓が同居する墓域といえます。



## 2 時期

周溝底部から出土した甕は、庄内式の土器の特徴である尖底・丸底傾向でなく平底で、さらに壺も長頸壺や細頸壺が残存しており、畿内第 V 様式の特徴を残した庄内式の最古段階土器を中心とした土器が多数でした。その時期の築造としますと、庄内期の勝山・石塚・ホケノ山などの前方後円形墳丘墓以前の築造となります。

前方後円墳の誕生は、「前方部の発達」に着目され、弥生墳丘墓の突出部（陸橋）が発達した

と考えられています。瀬田遺跡の円形周溝墓は、まさにその成立過程を裏付ける奈良盆地内の発見であったといえます。

## 3 墳形

円形周溝墓は、墳丘部（直径 19m）・周溝（幅 6～7m 深さ 50cm）、陸橋（東西部に 7m 最大幅 6m）で、埋葬施設は検出されませんでした。遺跡の墳形に着目すると、奈良盆地では例が少ない 3 つの特徴が備わっています。1 つは「円形」、1 つは「突出部」、1 つは「大型化」です。

円形の周溝墓は、後期に入り播磨・摂津地方にみられますが、終末期には摂津地方(河内地域は方形が主流)に多くみられます。これまでは、奈良盆地では十六面・薬王寺遺跡第 11 次調査 (S D101) のみでした。

また、突出部の備わった周溝墓は、摂津・河内・和泉など畿内各地でも検出されています。後期後半～終末期にかけて、前回の弥生ウォークで訪れた池田遺跡、黒石 10 号墓、久渡 3 号墓があり、その他に當麻町大田 1 号墓、五条市住川 1 号墓、菟田野町見田大沢 1 号墓など盆地の縁辺地での報告例が多いですが、前号で紹介しました法貴寺北遺跡の方形周溝墓もあります。

大型の墳丘墓は、同じ時期に 40m を越える倉敷市楯築墳丘墓や出雲市西谷 3 号墓や丹後半島の赤坂今井墳丘墓などが各地に出現しています。しかし、畿内では、中期から後期初頭の周溝墓が 5～10m 前後ですので、それらと比較すると大きくなりますが、この時期でも畿内では 20m 前後の周溝墓が大勢です。今回弥生ウォークで訪れる十六面・薬王寺遺跡の円形周溝墓の復元 18m も同規模です。

2 例の円形周溝墓からは目立った副葬品は出土しておらず、北部九州等にみられる階層分化の痕跡はみられません。しかし、瀬田遺跡の円形周溝墓は、弥生時代から古墳時代の墓制の変化が大和盆地に迫っていることを示してくれる遺跡といえます。

## 第 22 回 弥生ウォークのご案内

### 十六面・薬王寺遺跡とその周辺遺跡

#### 弥生ウォーク世話人グループ

(行程)

結崎駅 → 出屋敷遺跡 → 庵治遺跡 → 三河遺跡 → 三河東遺跡 → 伴堂東遺跡 → (三宅町資料館) → 黒田遺跡 → 黒田古墳(昼食) → 十六面・薬王寺遺跡 → 宮古北遺跡 → 保津・宮古遺跡 → 羽子田遺跡 → 近鉄田原本駅 (地図は、チラシに掲載)

#### 1 はじめに

前回ウォークは、広陵町の黒石 10 号墳、上牧久渡 3 号墳など弥生終末期の墳丘墓を確認しました。その際に、同時期の検出例として、田原本町の十六面・薬王寺(じゅうろくせん・やくおうじ)遺跡を報告しました。今回は、その現地を確認することとしました。訪れる遺跡は、いずれも唐古・鍵遺跡から 2km の範囲内にある「衛星集落」といわれています。

因みに、この時期の唐古・鍵遺跡では、環濠も再々掘削され、溝(幅 2~4m 深 50cm 前後)や井戸・小溝・土坑が検出されていますが、遺構・遺物量が少なく、集落構造が変化したとみられます。

なお、弥生終末期は、箸中山古墳(箸墓古墳)築造の時期を画期として、それ以前の 2 世紀末から 3 世紀半ばの庄内式期に相当します。この時期を注目することにより、弥生から古墳社会への移行プロセスの解明が可能となると思います。

#### 2 伴堂東遺跡の周辺遺跡

北西から南東方向の微高地(標高 43m)に立地し、弥生前期と終末期には集落活動が認められる遺跡です。

##### (1) 出屋敷(でやしき)遺跡

最初に訪れる遺跡は、近鉄線結崎駅周辺に広がる出屋敷遺跡です。駅東側の商業施設の事前

調査では、弥生後期の溝が検出されています。また、駅西側にある佐々木塚古墳の南側のマンション建設に伴う調査では、庄内期~布留期の土坑や東海系の土器を含む土器が多数出土し、その時期の活発な活動痕跡が認められます。

なお、弥生前期中葉には、土坑・溝や土器・木製梯子が出土しています。

##### (2) 庵治(おうじ)遺跡

出屋敷遺跡から南東 200m の距離にある旧石器後期から中世まで継続する遺跡です。弥生中期前半に微高地上に方形周溝墓(6)が検出されますが、弥生終末期から古墳期にかけては、微高地の縁辺に溝(2 条)とその内部から同時期の土器を含め井戸や集水施設が検出され、墓域と異なった土地利用がなされていたことが分ります。

##### (3) 三河遺跡・三河東遺跡

中期前半から後期にかけ断続的に方形周溝墓が造営されている三河遺跡ですが、同一微高地上の三河東遺跡でも中期後半の方形周溝墓が検出され一体の墓域と考えられています。そして、弥生後期後半から古墳期前期前半にかけては、多くの土坑や溝、竪穴住居状遺構などが検出され、集落の活動痕跡が認められます。

##### (4) 伴堂東(ともんどひがし)遺跡

遺跡は、北西から南東方向の微高地上に立地し、北側微高地縁辺部に弥生前期後半以来の方形周溝墓が断続的に古墳中期まで営まれます。しかし、南側の微高地尾根部分では、中期後半から後期にかけて集落活動が認められ、後期には遺構の数が一旦減少しますが、終末期から古墳前期にかけて土坑・ピットが認められ遺物量が増加します。特に、庄内期には、吉備や東海系の外来系土器が集中して出土しています。

##### 3 十六面・薬王寺遺跡

弥生中期では、遺跡北部で集落関係の遺構が、南部で方形周溝墓が検出されています。注目されるのは、遺跡南部の第 11 次調査で後期末~古

墳前期にかけて、円形周溝墓（SD—101 墳丘推定径 18.4m）や方形周溝墓が築造されています。今回は、奈良盆地で初見の円形周溝墓を現地確認します。

一方、遺跡北西部の大型商業施設の事前調査で、前期の土坑・溝、中期前半の溝・小溝が検出され小規模の集落活動がみられますが、弥生後期末から庄内期にかけては方形周溝墓群が検出され、墓域となっています。

#### 4 十六面・薬王寺遺跡の周辺遺跡

##### (1) 宮古北遺跡

十六面・薬王寺遺跡の北側に位置する遺跡です。遺跡内からは、前期から継続して土坑や土器などが出土していますが、遺構・遺物密度は希薄です。遺跡の中心は、物流センター建設に伴う第 1 次調査周辺です。同調査からは、弥生時代の河跡とその周辺には、後期後半の土坑・ピット・小溝が検出されています。また、河跡からは、後期後半のしがらみが検出されています。古墳前期（弥生終末期を含む）に入ると、河跡が埋没したあとに 2 条の溝と土坑が検出されています。土器は、弥生後期・庄内式・布留式土器が、瀬戸内・中四国系土器とともに出土しています。

なお、報告書では、後期の溝（SD—107）は、南東から北西方向に直線的に掘削され、総延長 650m に及ぶと予想されています。また、古墳前期には、方形区画が形成されたと推測されています。

##### (2) 保津・宮古遺跡

拠点集落と評価されていた保津・宮古遺跡ですが、遺跡範囲の見直しにより、北西エリアを宮古北遺跡に区分けされました。遺跡南部の第 31 次調査で弥生前期前半の土坑からは前期土器が出土し、周辺の第 15 次調査では前期末から中期初頭の土坑が検出され集落域と想定されていますが、濃厚な遺構・遺物ではありません。

しかし、第 15 次調査西側の調査（第 14 次調

査）では溝・土坑からは後期後半の土器が大量に出土し、付近の調査からも同時期の土坑・井戸、溝や方形周溝墓などが検出され、活発な集落活動がみられ、一帯は庄内期に継続する集落域であったことが判明しています。

##### (3) 羽子田遺跡

遺跡は、西端で保津・宮古遺跡と接して、遺跡には北西—南東方向の自然河道が検出されています。第 19 次調査（八尾池南西）では、庄内期～布留期の土坑 4 基が検出され、そのうち庄内期の大型土坑から木製農耕具が多量投棄されています。唐古・鍵遺跡から 800m に位置する遺跡ですが、唐古・鍵遺跡と異なった集落の変遷が見られます。

#### 5 最後に

終末期の畿内各地では、拠点集落は衰退し、その周辺に小規模の集落が数多くみられます。今回訪問する遺跡は、唐古・鍵遺跡の衛星集落と位置づけられ、弥生前期には希薄ですが活動痕跡があり、後期～終末期に活発化する点で共通しています。一方、唐古・鍵遺跡は、後期後半に大量の同時期の土器を含んで環濠が埋没しますが、庄内期になると遺跡東部などでは環濠の再掘削が認められその内部の居住遺構が増加し集住性が復活したと評価されています。しかし、再掘削の環濠が集落を囲繞しているか疑問視する意見もあります。今回は、弥生終末期の小規模集落を確認し、併せて唐古・鍵遺跡の集落動向を確認したいと思います。

#### 速報

バス旅行（日帰り）は、吉備（岡山平野）を予定しています。日時は、未定です。

<b>編集委員</b>	東 治雄	井上知章	植田洋高
	大森初美	谷口敬子	花坂志郎
	藤原隆雄	万徳順一	宮川真由美



